

## &lt;原 著&gt;

中学生における解釈バイアスと相手との親密性が  
主張行動に及ぼす影響尾棹 万純\* 野中 俊介\*\*\* 森田 典子\* 傳住 史乃\*\*\* 横山 貴洸\*\*\*\*  
川越 杏梨\*\*\*\*\* 山野 美樹\* 嶋田 洋徳\*\*\*\*\*

## 要 約

中学生における社交不安については、これまで個人の認知的処理過程からの検討が行われてきた一方で、環境要因としての友人関係の重要性も指摘されている。中学生においては、行動遂行に影響を及ぼす環境要因として友人関係が指摘されており、友人との親密性の差異が、刺激に対する反応の学習歴の差異として、認知的処理過程に影響することが想定される。そこで本研究においては、行動遂行における認知的処理過程として、解釈バイアスおよび予期不安が、親密性によってどのように異なるのかを検討することを目的とした。その結果、中学生における社交不安症状に対する介入においては、刺激をどのようにとらえているのかについて、親密性を含めた環境との相互作用的観点から整理することによって、より有効な介入につながる可能性が示唆された。

**キーワード**: 主張行動, 解釈バイアス, 親密性, 予期不安

## 問題と目的

子どもにおける社交不安は、対人関係をはじめとする生活上の多くの場面において不適応を引き起すことから、重要な問題であるとされている (Masia & Morris, 1998)。社交不安とは、「現実の、あるいは想像上の対人場面において個人的に評価されたり、評価されることが予測されることから生じる不安」と定義されており (Schlenker & Leary, 1982)、これまでも、さまざまな側面から検討が行われてきた (金

井・坂野, 2006)。

たとえば, Ginsburg, LaGreca, & Silverman (1998) は、社交不安傾向の高い児童は、自尊心の低さ、友人からの受容の程度の低さなどの特徴を有しており、対人関係において不適応になりやすいことを示している。また、社交不安傾向を示す児童は、自身の社会的スキルを、実際のスキルの程度にかかわらずより低く評価する傾向があることが指摘されており、このような「認知の誤り」が、社会的スキルの遂行を阻害し、不適応につながっていることが指摘されている (加計・佐藤・石川・嶋田・佐藤, 2008)。すなわち、社交不安傾向を示す児童はそうでない児童と比較して、認知的処理過程にネガティブな側面を有することが不適応を生み出す1つの原因になっていることが予測される。

\* 早稲田大学大学院人間科学研究科

\*\* 日本学術振興会特別研究員

\*\*\* ハウスコム株式会社

\*\*\*\* 横浜少年鑑別所

\*\*\*\*\* 神奈川県警察

\*\*\*\*\* 早稲田大学人間科学学術院

このようなネガティブな認知的処理過程のひとつとして、解釈バイアスの存在が指摘されている (Clark & Wells, 1995)。解釈バイアスとは、ポジティブでもネガティブでもなく、多義的に解釈が可能である曖昧な状況や刺激を、ネガティブに偏って解釈することである (Amin, Foa, & Coles, 1998)。たとえば、Melfsen & Florin (2002) においては、8歳から12歳までの児童を対象に、ポジティブ、ネガティブ、ニュートラルな表情刺激に対して、どのような表情に見えるかについて評定を求めたところ、社交不安の高い児童は、そうでない児童に比べて、ポジティブな表情刺激における正答率が低いことが示されている。また、Mohlman, Carmin, & Price (2007) においては、成人を対象として行なわれた研究ではあるものの、社交不安症の人はそうでない人に比べ、中性的な表情刺激から否定的な感情を読み取りやすいことが示されている。これらの知見を総合すると、社交不安における不適応状態が維持されるメカニズムは、子どもか成人かにかかわらず、「対人状況において、表情刺激に対する解釈バイアスなどを媒介した反応として予期不安が生じ、行動が阻害される」という悪循環に起因すると考えることが可能である。

このように、これまでの社交不安に関する研究においては、社交不安の症状に影響する認知的要因に関して多くの検討が行われてきた一方で、認知的要因以外からのアプローチへの有効性についても明らかにされている。たとえば、Acarturk, Cuijpers, van Straten, & Graaf (2009) は、社交不安症に対する心理的介入効果のメタ分析を行ない、認知的再体制化、エクスポージャー、社会的スキル訓練、リラクゼーションが、社交不安症状を呈する成人に対してその改善効果があることを示している。また、McLellan, Aflan, & Hudson (2015) は、青年期における社交不安における認知的介入の有効性

について文献レビューを行ない、認知的側面からの介入は有効である一方、社会的スキルの不足や孤独感が社交不安を大きく予測することから、実際の介入の際には認知的側面だけに焦点を当てることには限界があることを指摘している。

このように、児童青年期の社交不安症状の改善を包括的に考える際には、認知行動療法的観点の基礎となる「環境との相互作用」を前提として持つことが有用であるため、認知的側面からのみのアプローチでは、その効果が十分に得られなくなってしまう可能性が高いと考えられる。換言すれば、環境要因として入力された刺激がどのような特徴を持つかによって、個人特性としての解釈バイアスが行動遂行に影響を及ぼす程度が異なり、社交不安症状の程度にも大きく影響することが予測される。実際に、笠原・島谷 (2012) は、中学生を対象として、人間関係における不安感情は相手がどの程度の親密性の友人かによって、その表出の程度が異なることを明らかにしている。したがって、児童青年期の社交不安を記述する際には、環境要因として入力される刺激、すなわち、どの程度の親密性の人物を念頭に置いているのかを考慮する必要があると考えられる。

特に、中学生においては、このような環境要因の1つである「友人関係」の特徴として、高校生や大学生と比べて、友人に対する同調欲求や親和欲求が高いこと (柴橋, 2001)、異質な存在にみられることに対する不安や、異質な存在を拒否する傾向が強いこと (高坂, 2010) なども報告されている。このことから、中学生の対人関係は、刺激としての「親密性」の程度のみで規定されない複雑な情報処理過程が存在することが予測される。

これらのことを中学生の対人場面における情報処理の枠組みからとらえると、解釈バイアスが予期不安を媒介して間接的に行動遂行に影響

する場合と (Stopa & Clark, 2000), 解釈バイアスの高さが予期不安を媒介せずに行動遂行にネガティブに影響する場合がある (石川・坂野, 2005) というこれまでの知見の不一致は, 当該の対象との親密性の程度が考慮されていなかったことに起因する可能性がある。具体的には, 親密である友人に対しては, 主張行動が適応的行動であったとしても, 遂行後の結果が友人関係の維持に影響するかどうかにかかわらず過敏になっていることが明らかにされていることから (黒田・桜井, 2003), 自身の遂行する行動の結果, それまでの関係性が維持されるかどうかに関する「予期不安」が行動遂行にネガティブに大きな影響を及ぼすことが予測される。そのため, 相対的に「解釈バイアス」が直接的に行動遂行に及ぼす影響は小さいことが想定される。その一方で, あまり親密でない友人関係に対しては, かかわりの経験値の蓄積が少ないことに起因して, 相手の行動の結果の予測が困難であり, 予期不安の影響は小さくなると考えられる。したがって, 行動遂行においては, 解釈バイアスの賦活の程度は変わらないが, 相対的に個人内の特性的要因である表情に対する解釈バイアスが大きく影響することが予測される (Figure 1)。このように, 友人関係の刺激としての親密性

が, その適応的行動としての主張行動に影響するのに関して検討することによって, 対人関係における不安が適応的行動としての主張行動の遂行を阻害している中学生に対する, 認知的要因にとどまらない包括的な支援のアプローチの検討が可能になると考えられる。

そこで, 本研究においては, 刺激としての友人の親密性の程度の違いによって, 適応行動としての主張行動に影響を及ぼす認知的処理過程が, どのように異なるのかを明らかにすることを目的とする。

## 方 法

### 調査対象者

関東圏の私立中学校に在籍する1～3年生113名 (男子82名, 女子31名,  $13.00 \pm 0.94$  歳) を対象に, クラス単位で調査を行なった。

### 調査材料

**解釈バイアスの測定** 表情に対する解釈バイアスについて測定するために, 栗本・野村・嶋田・佐藤 (2011) の方法に従って表情刺激を作成した。デジタルカメラを用いて, 10名 (男性5名, 女性5名) のモデルに対して, 正面を直視したニュートラルな表情の表情刺激の作成を行なった。これら10名の表情に対して, 金井・笹川・陳・嶋田・坂野 (2007) の方法に基づき, 「脅威度」, 「感情価」, 「影響性」, について, それぞれ5件法で回答を求めた。これら10名の映像に対する「脅威度」, 「感情価」, 「影響性」, の3つの回答の合計得点を, 解釈バイアス得点とした。

**主張行動の測定** 対人葛藤場面における主張行動の程度を測定するために, 独自の映像刺激を作成した。映像刺激は, 中学生が経験しやすい対人葛藤場面として, 体育祭, 放課後, 委員会活動, という3つの場面を設定した。それぞれの場面は, 「体育祭で友人の応援をしに行く

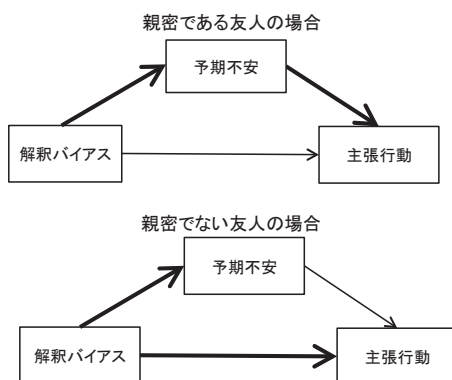


Figure 1 本研究で想定する仮説モデル

約束をしていたが、別の友人に他の種目の応援に誘われた」、「部活の大会前で練習をしたいが、友人から遊びに誘われた」、「委員会活動において、早く帰りたいが、友人から仕事の手伝いを頼まれた」、という場面である。これらの場面は、どうしても断らなければならないことはないが、断りたいと思う場面の想起を意図しており、すべての場面において、「あなたは今、誘いを断りたいと思っています」という教示を行なったことによって、これらの場面において誘いを断る行動を主張行動とみなした。そして、「あなたは映像の場面で、どの程度相手の要求を断れると思われましたか」と断る行動の遂行の程度をVASを用いて回答を求めた。そして、その場面におけるVAS得点を主張行動得点とした。なお、表情に対する解釈バイアスが交絡することを避けるため、誘う友人の表情はすべてニュートラルな刺激となるよう統一した。

**親密性の操作** 前述の各主張行動の各場面について、親密性について操作することを意図した2つの場面をそれぞれ作成した。親密性の高い条件においては、映像刺激の冒頭に「自分と同じクラスで、とても仲が良い」とし、「頻繁に一緒に遊びに行き、お互いに悩み相談に乗っている」と教示した。一方、親密性の低い条件においては、映像刺激の冒頭に「積極的に話したことの無いクラスメイト」とし、「自分と同じクラスだが、積極的に話したことがない。あいさつ程度ならするが、遊びに行ったことはない」と教示した。

これらの映像刺激は、場面3×親密性2の、計6場面の映像刺激を作成したことになる。

**予期不安の測定** 主張行動遂行に対する不安、すなわち予期不安の程度について測定するために、「主張行動をとることによって、相手との関係がどの程度悪くなる可能性があると思うか」について、VASを用いて回答を求めた。

## 手続きおよび倫理的配慮

本調査は学校長もしくは副校長、教頭に調査の趣旨を説明し、調査票の配布に関する承諾を得た学校に対して実施した。調査は学級単位で実施され、調査実施までに、調査を実施する学級担任からも書面にて研究参加に関する同意を得た。また、学級担任、生徒、保護者のそれぞれに対し、(a) 研究の目的と方法、(b) 研究参加は任意であり、同意撤回も可能であること、(c) 個人のプライバシーは保護されること、(d) 調査実施担当者の連絡先、を明記した文書を配布した。研究実施に際しては、上記について口頭で再度教示し、質問紙への回答をもって同意とみなした。なお、本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された（承認番号：2013-104）。

## 結果

### 分析対象者

分析に際しては、いずれの測度においても複数回答や記入漏れのなかった86名を分析対象とした（男子59名、女子27名、 $13.82 \pm 0.97$ 歳）（Table 1）。

Table 1 解釈バイアス、予期不安および主張行動

	親密度高条件	親密度低条件
予期不安	97.92 (59.12)	111.43 (62.64)
主張行動	176.10 (65.87)	184.70 (70.83)
解釈バイアス	93.20 (15.63)	

### 解釈バイアスおよび予期不安が主張行動に及ぼす影響

解釈バイアスおよび予期不安が主張行動に及

ぼす影響性が、親密性によって異なるかどうかを検討するために、Figure 1の仮説モデルに基づきパス解析を行なった (Figure 2)。なお、場面の3つは個人内の平均値を計算に用いている。その結果、親密度高条件では予期不安から主張行動へのパスが有意であり (解釈バイアス→主張行動； $\beta = -.13$ ,  $p = .22$ , 解釈バイアス→予期不安； $\beta = .12$ ,  $p = .27$ , 予期不安→主張行動； $\beta = -.23$ ,  $p = .03$ )、親密度低条件では解釈バイアスから予期不安へのパスが有意であり、解釈バイアスから主張行動へのパスが有意傾向であった (解釈バイアス→主張行動； $\beta = -.19$ ,  $p = .09$ , 解釈バイアス→予期不安； $\beta = .32$ ,  $p = .00$ , 予期不安→主張行動； $\beta = -.16$ ,  $p = .15$ )。すなわち、親密性の高い条件においては、解釈バイアスの程度にかかわらず、主張行動に対する予期不安の程度が主張行動を遂行する程度に影響を及ぼしていることが示された。その一方で、親密性の低い条件においては、解釈バイアスの程度が予期不安の程度に影響を及ぼしていること、および主張行動に影響を及ぼしている可能性があることが示された。

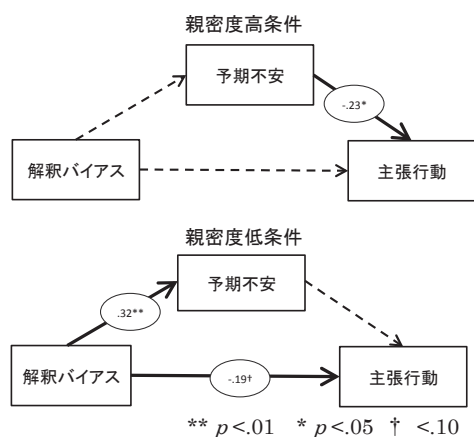


Figure 2 解釈バイアスが主張行動に及ぼす影響

## 考 察

### 解釈バイアスと予期不安および主張行動との関連

本研究は、主張行動の遂行に至る認知的処理過程として、予期不安が解釈バイアスを媒介するモデルを仮定し、それらの要因が主張行動に及ぼす影響が親密性の程度の違いによってどのように異なるのかを明らかにすることを目的とした。その結果、親密性の程度によって、解釈バイアスおよび予期不安が主張行動に及ぼす影響は異なる、というモデルの前提は支持されたとと言えるが、解釈バイアスが予期不安を高めるという影響性は確認することができず、当初のモデルが十分に支持されたとはいえないと考えられる。

本研究においては、親密性の高い状態像として、「頻繁に一緒に遊びに行く」など、行動を共にする日常的な機会が多いことを前提としており、当該の友人が、自分のはたらきかけに対して、どのような反応をするかという学習歴が十分にある状態を想定していた。その結果、適応行動としての主張行動に至る認知的処理過程において、予期不安の影響がみられることが明らかとなった。一方、親密性の低い条件においては、「積極的に話したことのないクラスメイト」として、これまでの当該の友人との相互作用が少ないことを教示し、学習による結果の予測が立ちにくい状態像を想定していた。データ分析の結果、有意ではなかったものの、解釈バイアスから主張行動への影響がある傾向にあることがうかがわれる。

このように、刺激としての親密性の違いによって認知的処理過程が異なることが示されたものの、親密性の高い条件において、前提としていた解釈バイアスから予期不安への影響性は確認されなかった。その理由として、入力され

た情報の処理プロセスにおいて、映像刺激の表情ではなく、「頻繁に一緒に遊びに行く」「仲がいい」という教示そのものに対して処理がはたらくことにより、予期不安が賦活した可能性が考えられる。五十嵐・木下・嶋田(2007)は、社会的場面における解釈バイアスには、初めて遭遇した刺激に対する解釈である“オンライン”の解釈と、その状況の刺激ではなく回顧的にもたらされる判断による解釈である“オフライン”の解釈があることを指摘している。したがって、本研究において、過去の学習歴を示す意図で使用した教示が、結果的に、解釈の手がかりとなり、提示された表情刺激に対する処理を抑制した可能性があると考えられる。

#### 本研究の限界と今後の展望

本研究の限界として、解釈バイアスの操作的定義および測定方法に関する問題点が挙げられる。本研究においては、想定している状況が対人場面であることから、対人場面において賦活しやすいと考えられるバイアスとして表情に対する解釈バイアスを採用し、その測定を行なった。しかしながら、対人場面において解釈バイアスが賦活しやすい刺激は、表情に限らず個々によって異なっていたことも考えられる。先行研究においては、解釈バイアスが賦活しやすいあいまいな行動として、表情刺激ばかりでなく、髪をかきあげる、脚を組む、などがあることが示されている(金井他, 2007)。したがって、解釈バイアスが生じた手がかりを同時に検討することによって、認知的処理過程についてより詳細な検討ができると考えられる。

本研究においては、適応行動としての主張行動とその阻害要因について、個人の認知要因ばかりではなく、環境との相互作用の中で生じるという認知行動的観点から検討したという点において心理臨床的意義があると考えられる。したがって、今後は、本研究の知見を踏まえた具

体的な介入方法について検討することによって、臨床場面に直結した研究知見が増えることが望まれる。

#### 引用文献

- Acarturk, C., Cuijpers, P., van Straten, A., & de Graaf, R. (2009). Psychological treatment of social anxiety disorder: A meta-analysis. *Psychological Medicine*, 39, 241-254.
- Amin, N., Foa, E. B., & Coles, M. E. (1998). Negative interpretation bias in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, 36, 945-957.
- Clark, D. M. & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. In R. G. Heimberg, M. R. Liebowitz, D. A. Hope, & F. R. Schneier (Eds.), *Social phobia: Diagnosis, assessment, and treatment* (pp.69-93). New York: Guilford Press.
- Ginsburg, G., LaGreca, A. M., & Silverman, W. K. (1998). Social anxiety in children with anxiety disorders: Relation with social and emotional functioning. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 26, 175-185.
- 五十嵐 友里・木下 克久・嶋田 洋徳 (2007). 社会的場面における解釈バイアスが状態不安に与える影響 早稲田大学人間科学研究, 20, 1-10.
- 石川 信一・坂野 雄二 (2005). 児童期不安症状の認知行動モデル構築の試み 行動療法研究, 31, 159-176.
- 加計 佳代子・佐藤 寛・石川 信一・嶋田 洋徳・佐藤 容子 (2008). 児童の認知の誤りが社会的スキルの自己評定と社会不安へ与える影響 行動療法研究, 34, 113-125.
- 金井 嘉宏・坂野 雄二 (2006). 社会不安障害患者の生理的反応に関する研究の展望 行

- 動療法研究, 32, 117-129.
- 金井 嘉宏・笹川 智子・陳 峻雯・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (2007). 社会不安障害傾向者と対人恐怖症傾向者における他者のあいまいな行動に対する解釈バイアス 行動療法研究, 33, 97-110.
- 笠原 華葉・島谷 まき子 (2012). 中学生の親和欲求および対友人不安感情が友人とのつきあい方に及ぼす影響 昭和女子大学生活心理研究紀要, 14, 69-78.
- 栗本 真衣・野村 和孝・嶋田 洋徳・佐藤 容子 (2011). 児童における表情のモニタリングと視点取得が場面の解釈および怒り喚起に及ぼす影響 宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要, 19, 15-22.
- 黒田 祐二・桜井 茂男 (2003). 中学生の友人関係場面における目標思考性と抑うつとの関係に介在するメカニズム - デイストレス/ユーストレス生成モデルの検討 - 教育心理学研究, 51, 86-95.
- Masia, C. L. & Morris, T. L. (1998). Parental factors associated with social anxiety: Methodological limitations and suggestions for integrated behavioral research. *Clinical Psychology: Science and Practice*, 5, 211-228.
- Melfsen, S. & Florin, I. (2002). Do socially anxious children show deficits in classifying facial expressions of emotions? *Journal of Nonverbal Behavior*, 26, 109-126.
- McLellan, L. F., Aflano, C. A., & Hudson, J. L. (2015). Cognition-focused interventions for social anxiety disorder among adolescents. In Ranta, K., La Greca A. M. Garcia-Lopez, L. Marttunen, M. (Eds.) *Social Anxiety and Phobia in Adolescents: Development, Manifestation, and Intervention Strategies* (pp.225-250). New York: Springer.
- Mohlman, J., Carmin, C. N. & Price, R. B. (2007). Jumping to interpretations: Social anxiety disorder and the identification of emotional facial expressions. *Behaviour Research and Therapy*, 45, 591-599.
- Schlenker, B. & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.
- 柴橋 祐子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と他社の表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12, 123-134.
- Stopa, L. & Clark, D. M. (2000). Social phobia and interpretation of social events. *Behaviour Research and Therapy*, 38, 273-283.
- 高坂 康雅 (2010). 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向 - 青年期における変化と友人関係満足度との関連 - 教育心理学研究, 58, 338-347.

## Effects of intimacy and the interpretation bias to assertive behavior in junior high school students

Masumi OSAO\*, Shunsuke NONAKA\*,\*\*, Noriko MORITA\*, Shino DENZUMI\*\*\*,  
Takahiro YOKOYAMA\*\*\*\*, Anri KAWAGOE\*\*\*\*\*, Miki YAMANO\*,  
and Hironori SHIMADA\*\*\*\*\*

\*Graduate School of Human Sciences, Waseda University

\*\* Research Fellow of the Japan Society for Promotion of Science

\*\*\* HOUSECOM Corporation

\*\*\*\*Yokohama Juvenile Classification Home

\*\*\*\*\*Kanagawa Prefectural Police

\*\*\*\*\*Faculty of Human Sciences, Waseda University

### Abstract

Regarding social anxiety in middle school students, while cognitive processes have been studied because of their importance in social anxiety, behavioral intervention might also be critical. In junior high school students, relationships with friends strongly affect one's behavior, and so differences in the intimacy of friend relationships may affect cognitive processes by means of differences in learning responses to stimuli. Therefore, in this study, we studied differences in the process from interpretation bias and anticipatory anxiety on assertive behavior as a function of differences in intimacy. Results showed that, as a cognitive process in behavioral performance, interpretation bias and anticipatory anxiety differ as a function of intimacy. Accordingly, in social anxiety interventions for junior high school students focusing on how stimuli are interpreted, more effective interventions might be possible by organizing them based on an interaction perspective that includes the intimacy of the environment.

**Key words:** interpretation bias, assertive behavior, intimacy, anticipatory anxiety